

スマートライフケア 社会の実現に向けて

COINS中核機関 iCONMの取り組み ②

2045年、65歳以上が人口の3割超を占め、半数の地方自治体が消滅の危機に。こんな超高齢社会の未来で、日本を支えるバリバリの現役世代を担うのが今の高校生だ。

「若者の負担が増える」「働き手が減る」「健康寿命が縮

超高齢社会見据える高校生



川崎市立総合科学高校科学科の生徒ら

「病院や介護施設が不足する」「介護人材が少ない」「医療費は増え、年金は足りない」。大きな紙に、将来起こり得る課題を書いた付箋が次々に貼られていく。

川崎市立総合科学高校科学科2年の約40人は昨年12月、超高齢社会と向き合っていました。どんな課題を認識していますか？。ワークショップの世話役は、川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター（iCONM）の研究者らだ。

iCONMの中核プロジェクトCOINSでは、日常生活の中で自律的に健康を手に行うことができるスマートライフケア社会の実現を目指している。その手段が、ウイル

先端研究者と解決策探る

ワークショップでひらめき光る

スライスのナノマシンを体内の微小環境に常時循環させ、検出、診断、治療を行う「体内病院」。2045年の実現を目標に掲げる研究現場に、同校は毎年訪問し先端研究に触れてきた。

生徒と研究者による対話は、共有した課題を集約する作業に移っていく。全6班のうち半分が「健康」、2つが労働人口の減少、1つが「社会保障費の増大」をテーマに取り上げた。根本的な問題は、高齢者が健康じゃなくなるから

健康を保持できれば、解決できる課題は多い。ある生徒の意見が未来の課題を凝縮していた。

次の焦点は、こうした課題にどう対処するか。

「病気になるら過去に戻る」「パワースーツがサポートする」「健康でなくても外出できる社会にする」「SNSでつながる」「肉体をなくし、脳だけを維持する」。生徒のひらめきがさまざまな角度から飛ぶ。研究者は専門知識を伝え、科学的に解決手段を考え

る。約100人を収容できる教室は次第に熱を帯びていく。

各々は数枚のプレゼン資料に議論をまとめていった。健康の維持・増進で労働人口の減少を食い止めることを目指す4班は、「進化版言語ゲーム」を利用して脳の健康を保ち、「人工義体の活用」で運動能力を飛躍的に向上する未来を描いた。5班は「鏡の中の

必要性を指摘した。



↑ジウム参加
↑シム登録
↑INS申し込み
↑COINS参加

AIが体調を診断し認知症を防ぐ」と構想した。

3班は「手術が不要で一つのワクチンで薬を代用する医療技術の開発」や「害のないたばこや酒の開発」が、健康寿命や病床不足を解決すると提案した。1班は社会保障費の増大を防ぐには「社会の愛が大切」と考え、「個人情報を利用してつながるシステム」

生徒は、超高齢社会を背負う自身の役割を「想像しにくい」と話す一方、「技術が間に合わなくても、着実に取り組むことが将来の社会を変える」と前向きだ。同校の田代定男教諭は「いつもの姿からは想像できないほど生徒たちが輝いていた、川崎市教育委員会教育政策室の安齋陽子担当課長は「学び合う姿から未来に希望を感じる」とそれぞれ期待を寄せた。

生徒の斬新な発案に新しい気づきを得た研究者らも、自身の研究のギアをもう一段あげるきっかけになったはずだ。スマートライフケア社会を実現するには、世代を越えて、社会全体が課題に向き合い、乗り越える努力が欠かせない。COINSは1月21日にシンポジウムをウェブ開催し、高校生とのワークショップの内容を含め、有識者を招き議論を深める。